

2002 FIFAワールドカップ開催記念
野村證券presents

Yo-Yo Ma
&
Mark Morris
Dance Group
&
Vadim Sakharov

ヨーヨー・マ&マーク・モリス ダンスグループ&ヴァディム・サハロフ

2 0 0 2



Y o - Y o M a & M a r k M cr



r r i s D a n c e G r o u p

MARK MORRIS



DANCE GROUP

ご挨拶

私ども2002年FIFAワールドカップ日本組織委員会(JAWOC)ではアジアで初めて行われる
FIFAワールドカップ™を飾るオープニングにあわせて、野村證券株式会社様の
特別協賛により東京ほか開催5都市(大分・静岡・新潟・大阪・横浜)をめぐる
「ヨーヨー・マ&マーク・モリス ダンスグループ&ヴァディム・サハロフ日本公演」を実施致します。
サッカーは世界中の全ての大陸でプレーされ、世界で最も多くの競技人口を持つ、
国境を越えたスポーツです。日本と韓国で共催される2002 FIFAワールドカップ™は、
まさにこの事を実証するための大会でもあります。
このたび開催されるコンサートには、アジアを代表するチェリストのヨーヨー・マ氏をはじめ、
アメリカのダンス界をリードするマークモリス・ダンスグループ、
ロシアの著名なピアニストであるヴァディム・サハロフ氏が登場します。
世界各地で人々に感動を与えてきた彼らが日本で一堂に会し、
国籍や文化を超えたコラボレーションによる新たな芸術の輝きを生み出します。
日本と韓国に集う世界32カ国の優れたプレーヤーたちとともに、
皆様に感動と興奮の一時をお届け致します。
それでは、素晴らしいパフォーマンスをごゆっくりとお楽しみ下さい。

那須 翔



2002年FIFAワールドカップ日本組織委員会(JAWOC)会長
那須 翔

「2002 FIFAワールドカップTM開催記念」ヨーヨー・マとマーク・モリス、
ヴァディム・サハロフのジョイントコンサートにご来駕いただき、誠に有難うございます。
世界最大のイベントである2002 FIFAワールドカップTMも、
いよいよキックオフの瞬間を迎えます。
私共野村證券はこのワールドカップをオフィシャルサプライヤーという
立場でサポートさせていただいております。
今回、このワールドカップ開催記念のイベントとして、
ヨーヨー・マ氏をはじめ、芸術性の高さで世界的評価を得ている
アーティストの方達のジョイントコンサートにも、
特別協賛させていただくことは、二重の喜びでございます。
企業の社会的貢献のツールとして「メセナ」が叫ばれて久しいですが、
私共は今後も、こうした意義深く、かつ価値の高いイベントに、
地に足をつけた堅実なサポートをさせていただく所存でございます。
何卒、皆様方のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。
本日は、心ゆくまでご鑑賞、お楽しみくだされば、幸いに存じます。

氏家 純一



野村證券株式会社 取締役社長

氏家 純一

2002 FIFAワールドカップ™開催記念行事として、ヨーヨー・マと
マーク・モリス ダンスグループ、ヴァディム・サハロフ日本公演を実現させていただいた、
2002年FIFAワールドカップ日本組織委員会、そして野村證券様、今回は大変おめでとうございます。
今日では4年ごとに開催されるワールドカップは、スポーツの共通の起源を通して、
違った文化や背景を持ち、心から応援してくださる何百万人ものファンの方たちが集うという
伝統になりつつあります。私自身も、幸運なことに前回1998年の大会を、家族と一緒に
休暇で訪れていたフランスで観戦することができ、直接体験する機会がありましたので、
それがどれだけの興奮を巻き起こすかを知っています。
今年のワールドカップの大会は、ワールドカップ始まって以来の様々な歴史的経緯があります。
この世界的なイベントが、アジアで開催されるというのは史上初です。
そして、2つの国がワールドカップの開催国になるということも、また初めてのことです。
開催国の日本と韓国の両国は、サッカーの歴史も含めて、豊かな文化と伝統につちかわれた国です。
両国のこのイベントへの開催協力は、両国のたいへん重要な相互親善の象徴と言えるでしょう。
マーク・モリス ダンスグループ、ヴァディム・サハロフとともに、この歴史的な行事を
祝うことができるのは私にとって喜ばしく、また名誉なことです。

Yo-Yo Ma



ヨーヨー・マ



Yo-Yo Ma & Mark Morris Dance Group & Vadim Sakharov





公演スケジュール

Concert Schedule

ヨーヨー・マ&マーク・モリス ダンスグループ ガラ・コンサート

5/30(木) 19:00 【東京】 Bunkamuraオーチャードホール

企画・運営:ミュージックプラント

運営協力:Bunkamuraオーチャードホール

ヨーヨー・マ&マーク・モリス ダンスグループ

5/31(金) 19:00 【東京】 Bunkamuraオーチャードホール

6/1(土) 14:00 【東京】 Bunkamuraオーチャードホール

6/1(土) 18:00 【東京】 Bunkamuraオーチャードホール

企画・運営:ミュージックプラント

運営協力:Bunkamuraオーチャードホール

6/3(月) 19:00 【大分】 大分県立総合文化センター グランシアタ【OBS大分放送開局50周年記念】

共催:2002年FIFAワールドカップ大分推進委員会、財団法人大分県文化振興財団、OBS大分放送

6/5(水) 19:00 【静岡】 グランシップ大ホール・海

共催:2002年ワールドカップ静岡県開催推進委員会、財団法人静岡県文化財団

運営協力:グランシップ

6/7(金) 18:30 【新潟】 新潟県民会館・大ホール【NST開局35周年記念】

共催:NST新潟総合テレビ、2002年FIFAワールドカップ新潟県推進委員会

ヨーヨー・マ&ヴァディム・サハロフ デュオ・リサイタル

6/2(日) 18:00【大阪】ザ・シンフォニーホール

共催:朝日放送、2002年FIFAワールドカップ大阪市開催推進委員会

運営協力:ザ・シンフォニーホール

6/6(木) 19:00【横浜】横浜みなとみらいホール

共催:2002年FIFAワールドカップ横浜開催推進委員会

運営協力:横浜みなとみらいホール(財団法人横浜市文化振興財団)

全公演

主催:2002年FIFAワールドカップ日本組織委員会(JAWOC)

特別協賛:野村證券株式会社

ヨーヨー・マ 2002年11月来日スケジュール(予定)

13(水) 奈良県文化会館 お問合せ:毎日放送 Tel 06-6371-9157

14(木) 富山県民会館 お問合せ:北日本放送事業部 Tel 076-432-5555

15(金) 石川県立音楽堂 お問合せ:(財)石川県音楽文化振興財団 Tel 076-232-0171

16(土) 札幌コンサートホール Kitara お問合せ:道新文化事業社 Tel 011-241-5161

17(日) 宮城県民会館 お問合せ:宮城県文化振興財団 Tel 022-225-8641

河北新報社事業部 Tel 022-211-1332

19(火) サントリーホール お問合せ:ミュージックプラント Tel 03-3466-2258

20(水) 東京芸術劇場大ホール お問合せ:ミュージックプラント Tel 03-3466-2258

21(木) 東京芸術劇場 大ホール お問合せ:ミュージックプラント Tel 03-3466-2258

22(金) 広島厚生年金会館大ホール お問合せ:グリーンコンサート広島 Tel 082-228-8868

プログラム

Program

ヨーヨー・マ & マーク・モリス ダンスグループ ガラ・コンサート

Yo-Yo Ma & Mark Morris Dance Group Gala Concert

5/30 Thu. 19:00 Bunkamura Orchard Hall

「オルティン・ドー」 (モンゴル長唄/民謡)

"Mongolian Long Song" (Traditional)

ホンゴルズル・ガンバートル(長唄)、ヨーヨー・マ、チョゴバダラフィン・ダシジャヴ(馬頭琴)
Khongorzul Ganbaatar (Vocalist), Yo-Yo Ma, Tsogbadrakh Dashjav (Morin Khuur)

「トリスト」 (ジーユン・キム)

"Tryst" (Jihyun Kim)

ヨーヨー・マ(チェロ)、ジーユン・キム(カヤグム)、ハイメ・ゴンザレス(オーボエ)
Yo-Yo Ma (Cello), Jihyun Kim (Kayagum), Jaime Gonzalez (Oboe)

「5つのフィンランド民謡」 (間宮芳生)

"5 Finnish Folk Song" (Michio Mamiya)

ヨーヨー・マ(チェロ)、ジョエル・ファン(ピアノ) Yo-Yo Ma (Cello), Joel Fan (Piano)

Interval

振付: マーク・モリス Choreography by Mark Morris

「アーギュメント」 (シューマン: 5つの民謡風小品op.102)

"The Argument" R.Schumann: Fünf Stücke im Volkston

第1曲「空の空」 I. "Vanitas vanitatum" Mit Humor

第2曲「ゆっくりと」 II. Langsam

第3曲「速くなく、たつぷりとした音で奏する」 III. Nicht schnell, mit viel Ton zu spielen

第4曲「急ぎすぎずに」 IV. Nicht zu rasch

第5曲「力強く、はっきりと」 V. Stark und markiert

第6曲「空の空」 ※第1曲の繰り返し VI. "Vanitas vanitatum" Mit Humor

照明: マイケル・ヒーボウスキ

衣装デザイン: エリザベス・カーツマン

ヨーヨー・マ(チェロ)、イーサン・アイヴァーソン(ピアノ)

[マーク・モリス ダンスグループ]

ジュリー・ウォードン、チャールトン・ボイド、マージョリー・フォークマン、ジョン・ヘギンボサム、ミシェル・ヤード、ショーン・ギャノン

〜ハワード・ギルマンの思い出に〜

初演: 1999年2月26日ボストン、ウォン劇場

「フォーリング・ダウン・ステアーズ」(J.S.バッハ:無伴奏チェロ組曲第3番 ハ長調 BWV.1009)
"Falling Down Stairs" J. S. Bach: Third Suite for unaccompanied cello in C Major BWV.1009

照明:マイケル・ヒーボウスキ

衣装デザイン:アイザック・ミズラヒ

ヨーヨー・マ(チェロ)

[マーク・モリス ダンスグループ]

ジョー・ボウイ、チャールトン・ボイド、マージョリー・フォークマン、ショーン・ギャノン、ローレン・グラント、
ジョン・ヘギンボサム、デイヴィッド・レヴェンソル、ブレイドン・マクドナルド、アンバー・マーケンス、グレゴリー・ヌーバー、
マイリ・オカムラ、ジュン・オオムラ、マシュー・ローズ、ジュリー・ウォーデン、ミシェル・ヤード

初演:1997年3月6日 カリフォルニア、パークレー、ゼラーバック・ホール

ヨーヨー・マ & マーク・モリス ダンスグループ

Yo-Yo Ma & Mark Morris Dance Group

5/31 Fri. 19:00 Bunkamura Orchard Hall

6/1 Sat. 14:00 Bunkamura Orchard Hall

6/1 Sat. 18:00 Bunkamura Orchard Hall

6/3 Mon. 19:00 Oita Grand Theater

6/5 Wed. 19:00 Shizuoka Grand Ship

6/7 Fri. 18:30 Niigata Kenmin Kaikan

振付:マーク・モリス Choreography by Mark Morris

「アーギュメント」(シューマン:5つの民謡風小品op.102)

"The Argument" R.Schumann: Funf Stucke im Volkston

第1曲「空の空」 I. "Vanitas vanitatum" Mit Humor

第2曲「ゆっくりと」 II. Langsam

第3曲「速くなく、たつぷりとした音で奏する」 III. Nicht schnell, mit viel Ton zu spielen

第4曲「急ぎすぎずに」 IV. Nicht zu rasch

第5曲「力強く、はっきりと」 V. Stark und markiert

第6曲「空の空」※第1曲の繰り返し VI. "Vanitas vanitatum" Mit Humor

照明:マイケル・ヒーボウスキ

衣装デザイン:エリザベス・カーツマン

ヨーヨー・マ(チェロ)、イーサン・アイヴァーソン(ピアノ)

[マーク・モリス ダンスグループ]

ジュリー・ウォードン、チャールトン・ボイド、マージョリー・フォークマン、ジョン・ヘギンボサム、ミシェル・ヤード、ショーン・ギャノン

〜ハワード・ギルマンの思い出に〜

初演:1999年2月26日ボストン、ウォン劇場

プログラム

Program

「フォーリング・ダウン・ステアーズ」 (J.S.バッハ: 無伴奏チェロ組曲第3番 ハ長調 BWV.1009)
"Falling Down Stairs" J.S.Bach: Third Suite for unaccompanied cello in C Major BWV.1009

照明: マイケル・ヒーボウスキ

衣装デザイン: アイザック・ミズラヒ

ヨーヨー・マ (チェロ)

[マーク・モリス ダンスグループ]

ジョー・ボウイ、チャールトン・ボイド、マージョリー・フォークマン、ショーン・ギャノンローレン・グラント、
ジョン・ヘギンボサム、デイヴィッド・レヴェンソル、ブレイドン・マクドナルド、アンバー・マーケンス、グレゴリー・ヌーバー、
マイリ・オカムラ、マシュー・ローズ、ジュリー・ウォーデン、ミシェル・ヤード

初演: 1997年3月6日 カリフォルニア、バークレー、ゼラーバック・ホール

Interval

「ペカディロス」 (サティ: 子供らしさ (「短い子供のお話し」「絵のような子供らしさ」「うるさいいたずら」))

"Peccadillos" E.Satie: Peccadillos ("Menus propos enfantins" "Enfantillages pittoresques", "Peccadilles importunes")

照明: マイケル・ヒーボウスキ

イーサン・アイヴァーソン (ピアノ)

マーク・モリス

初演: 2000年6月7日 ニューヨーク、ブルックリン音楽アカデミー

「ヴィー」 (シューマン: ピアノ五重奏曲 変ホ長調 op.44)

"V" R.Schumann: Quintet in E flat for piano and strings, op.44

第1楽章「アレグロ・ブリランテ」

Allegro brillante

第2楽章「イン・モード・ドゥナ・マルチャ、ウン・ポーコ・ラルガメンテ —— アジタート」

In modo d'una Marcia. Un poco largamente —— Agitato

第3楽章「スケルツォ・モルト・ヴィヴァーチェ」

Scherzo molto vivace

第4楽章「アレグロ マ・ノン・トロツポ」

Allegro, ma non troppo

照明: マイケル・ヒーボウスキ

衣装デザイン: マーティン・ベイクルディナス

コリン・ジェイコブセン (ヴァイオリン)、アンドレア・シュルツ (ヴァイオリン)、
ジェシカ・トロイ (ヴィオラ)、ヨーヨー・マ (チェロ)、イラン・ラックマン (ピアノ)

[マーク・モリス ダンスグループ]

ジョー・ボーイ、チャールトン・ボイド、マージョリー・フォークマン、ローレン・グラント、
ジョン・ヘギンボサム、デイヴィッド・レヴェンソル、ブレイドン・マクドナルド、アンバー・マーケンス、グレゴリー・ヌーバー、
マイリ・オカムラ、マシュー・ローズ、ジュリー・ウォーデン、ミシェル・ヤード

ニューヨーク市に捧げる

初演: 2001年10月16日 ロンドン、サドラーズ・ウェルズ劇場

ヨーヨー・マ & ヴァディム・サハロフ デュオ・リサイタル

Yo-Yo Ma & Vadim Sakharov Duo Recital

6/2 Sun. 18:00 The Symphony Hall

6/6 Thu. 19:00 Yokohama Minato Mirai Hall

「オール・ベートーヴェン・プログラム」

All Beethoven Program

チェロ・ソナタ第2番ト短調 op.5-2

Cello Sonata No. 2 in g minor

チェロ・ソナタ第5番ニ長調 op.102-2

Cello Sonata No. 5 in D Major

Interval

「魔笛」の主題による12の変奏曲へ長調 op.66

Magic Flute Variations in F Major op.66

チェロ・ソナタ第3番イ長調 op.69

Cello Sonata No.3 in A Major



曲目解説

Program Note

ヨーヨー・マ & マーク・モリス ダンスグループ (5/30 ガラ・コンサート 第1部)

「オルティン・ドー」「トリスト」「5つのフィンランド民謡」

シルクロードが象徴するもの、そしてその現実性の両方に、チェリストのヨーヨー・マは魅了されました。そしてマはシルクロード・プロジェクトを設立して、音楽と音楽に対する考え方がどのように世界を駆け巡っているかを探り始めました。シルクロード・プロジェクトの第一の活動目的は、作曲家のみなさんに、シルクロードに象徴される東西文化交流の精神を伝える音楽を書いていただく、ということです。そこから、中国、モンゴル、韓国、アルメニア、トルコ、ウズベキスタン、タジキスタン、イラン、そしてアゼルバイジャンといったシルクロード周辺の国々に住む作曲家のみなさんに声が掛けられました。そしてどなたもすばらしい曲を書いてくださいました。今晚は、そのうちの何曲かが演奏されます。「トリスト」は、韓国の作曲家ジューン・キムによって作曲されました。

モンゴルのすばらしい長唄をフィーチャーした伝統的な曲を、まずはお楽しみください。

ホンゴルズル・ガンバータルは、このモンゴルの長唄（オルティン・ドー）の屈指の歌手です。長唄は、モンゴル特有の歌唱法で、モンゴル民謡を特徴づけるものです。歌手は、遠くまで声が届く歌い方を訓練します。まさにゴビ砂漠のような広い場所でも響き渡る声を身につけようとします。この長唄は、人に語りかけるような非常に洗練されたスタイルも備えており、世界でいちばん古い歌唱法と言われます。歌手は、長唄を歌い上げるために、大きく息を吸い込んで、強く伸びのある声を出します。そして同時に非常に美しいメロディアスなフレーズで歌い上げなければなりません。ガンバータルは、都市化されたモンゴルの新時代の若者を代表する人で、モンゴルの伝統的な音楽も、外国の音楽も、分け隔てなく楽しんでいます。多くの同時代の人たちと同じように、彼女はゲルというモンゴル人の円形天幕住居に設けられた会場だけでなく、例えばウランバートルにあるたくさんのディスコやインターネット・カフェといった場所でも、気持ちよく歌うことができます。長唄の声が伝えるあの高揚した感情は、韓国宮廷の伝統を強く感じさせます。韓国生まれの作曲家ジューン・キム（1968年生まれ）は、ソウルの延世大学を卒業し、アメリカのイエール大学で音楽の博士号を修得しました。つい最近、そのアジアと電気音楽の研究に対して、ハーヴァード大学からバンティング・フェローシップを授与されました。「トリスト」は、美しい娼婦チン・オク（チン・オクは眞玉と書きます。つまり、その意味は「真の玉」です）と、高名な学者で詩人のジョン・チョル（1536-93）（ジョン・チョルは正鑑と書きます。すなわち、「真の鉄」の意味です）の愛をうたっています。北朝鮮の慈江道江界市の村落に逃れていたとき、ジョン・チョルは美しいチン・オクに出会います。チン・オクはジョン・チョルに、韓国の琴の伽耶琴（カヤグム）を奏でます。そして二人はたがいに次のような詩を交わします。その詩をもとに、「トリスト」は書かれました。

眞玉は戻った

それは汚れた玉だったと思う。

しかし、わたしの間近にある、おまえのその冷たい表面の下には、

美しい、ほんものの眞石が隠されている。

眞錐とふいごを使って、

そして最後にわたしが息をふっと吹きかければ、
おまえは新しく生まれ変わる。

これに娼婦オクは応えます。

鉄は戻りました。

もろい鉄のかたまりだったと思います。

けれども、わたしの間近にある、あなたのその冷たい表面の下には、
熱く鍛え上げられた硬い鉄の成分が隠されています。

かまとふいごを使って、

そして最後にわたしがふっと息を吹きかければ、
あなたはもう火にも負けません。

腹の底から絞り出すような歌い手の叫び声が、伽耶琴とともに響き渡ります。そしてそこにチェロやオーボエも加わります。
(オーボエは韓国の^{ピリ}篳篥の音色をまねて奏でられます。) 韓国のジャンダン(長短)と呼ばれる独特のリズム
(この曲では、3つのジャンダンと2つのジャンダンに分かれています)が、このラブソングに、浮き浮きとした、思わず
踊り出したくなるような調子を与えます。

日本人の作曲家、間宮芳生は、「5つのフィンランド民謡」を1977年に書き上げました。間宮は、この曲を通じて、日本の
現代音楽とフィンランドの民謡、さらにはフランスの印象主義音楽を融合しようとしています。そしてそこから、複数の
文化のみならず、複数の時代が重なり合った作品を作り上げました。氏は、東京音楽学校(現東京芸術大学)で西洋の
クラシック音楽を学び、1975年にフィンランドに渡りました。そこで、サーメたち(the Sami; ノルウェー、スウェーデン、
フィンランドの北部地域をラップランドといって、ここに住むひとたちはラップ人として知られているが、彼らは自分たちの
ことをサーメと呼ぶことが多い)の音楽や、北極圏スカンジナビア地域に住む狩猟民族(彼らの音楽やことばは、さか
のぼれば、東洋とつながりがあることを示しています)の音楽を研究しました。このように間宮の「民謡」は、様々な文化の
層がいくつも重なってできあがったものですから、どんな音楽に属するかという「ジャンル分け」がなかなかできません。
第2楽章の「泣きうた」では、パッセージが突然停止したかと思えば、次の瞬間、急速なピッチで動き出します。第3楽章の
「家なきこじき」は、間宮が大きな影響を受けたと言われる、ドビュッシーやプーランクの音楽を彷彿とさせます。しかし、
同時に間宮は、そこに「日本人の感覚」というものを吹き込んでいます。最終楽章の「ヨーイク」は、サーメの音楽の
要素を感じさせますが、繰り返し聞こえてくる鐘の音のような下降5音音階が、再びドビュッシーを思い起こさせます。
ドビュッシーもまた、ピアノ音楽に同様のモチーフを持ち込んで、東洋のイメージの再現を試みました。

テッド・レヴィン、エスター・ウォン(シルクロード・プロジェクト事務局) 訳: 上杉隼人

ような子供らしさ》は、第1曲〈1日への小さなプレリュード〉、第2曲〈予守歌〉、第3曲〈大きな階段の行進曲〉。そして《うるさいたずら》は第1曲〈秀才の友だちをやっかむこと〉、第2曲〈彼のジャムパンを食べてしまう〉、第3曲〈輪回し遊びの輪をとるために、彼の足の魚の目を利用すること〉という構成で、ピアニストのマルグリット・ロンに捧げられている。9曲はいずれも中音域の白鍵だけを使って書かれ、作曲者自身によって添えられた詩的な言葉と共に、生き生きとした童話世界を生み出している。

「ヴィー」 シューマン 《ピアノ五重奏曲》 変ホ長調 作品44

シューマンが本格的に室内楽に取り組んだのは、1842年のことであった。1840年のクララとの結婚によって、それまでピアノ曲ばかりに向けられていた情熱は言葉や歌をもった音楽に注ぎ込まれ、その年には130もの歌曲が誕生した。翌1841年には交響曲や管弦楽曲に挑んだシューマンが次に取り組んだのが室内楽であった。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの作品を改めて研究し、その上でドイツ・ロマン的な語法を室内楽という様式に限定して、弦楽四重奏曲、ピアノ四重奏曲など優れた作品に反映させていった。シューマンの室内楽曲の中でも最も親しまれ、広く愛されている《ピアノ五重奏曲》もこの年に完成している。第1楽章は力強い第1主題と、ピアノでしっとりと演奏される第2主題を持つソナタ形式。第2楽章は葬送行進曲風ではあるが、様々な曲想が入れ替わり挿入される。第3楽章はピアノの音階風の急速な上昇で始まるスケルツォで、2つのトリオを持つ形になっている。第4楽章は自由なソナタ形式で、全体を締め括る壮大な終曲である。壮麗で力強いコーダでは、第1主題を初め、第1楽章の主題等も現れながら、最後の頂点が築き上げられる。

真嶋雄大(音楽評論家)



曲目解説

Program Note

ヨーヨー・マ & ヴァディム・サハロフ デュオ・リサイタル (6/2、6/6)

ベートーヴェン(1770～1827)は、生涯に5つのチェロ・ソナタを作曲したが、それらは、作品5の2つのソナタ(第1番と第2番)、作品69(第3番)、そして、作品102の2つのソナタ(第4番と第5番)の3つのグループに分けられる。この3つのグループは、おおよそ、初期、中期、後期に分類することができ、本日演奏される3つのソナタ(第2番、第3番、第5番)は、その3つの時期から一つずつ選ばれるという形になっている。

チェロ・ソナタ第2番ト短調 作品5-2

チェロ・ソナタ第2番(作品5-2)は、チェロ・ソナタ第1番(作品5-1)とともに1796年に作曲されたベートーヴェンの最初のチェロ・ソナタであり、最初の二重奏ソナタである。ベートーヴェンは、この2つのソナタで、それまで通奏低音の楽器として使われてきたチェロ(ハイドンやモーツァルトはチェロ・ソナタを作曲していない)を独奏楽器として扱い、ピアノと対等のパートナーシップを与えることに挑戦したのであった。

第1楽章: アダージョ・ソステヌート・エ・エスプレッシヴォ～アレグロ・モルト・ピウ・トスト・プレスト。ソナタ形式。アダージョの序奏は5分以上にも及ぶ長大なもの。アレグロの主部に入ると、チェロが第1主題を提示し、ピアノが応える。第2主題部は明るさをもったもの。

第2楽章: ロンド、アレグロ。ロンド形式。まずはじめにピアノがロンド主題を奏でる。チャーミングな副主題をはさみながら、軽快なロンドが展開されていく。

チェロ・ソナタ第5番ニ長調 作品102-2

チェロ・ソナタ第5番(作品102-2)は、第4番(作品102-1)とともに作品102がつけられた、彼にとっての最後のチェロ・ソナタであるとともに、最後の二重奏ソナタである。作品102の2つのソナタは、(1812年から13年にかけて書かれた)交響曲第7番、交響曲第8番、ピアノ三重奏曲第7番《大公》などの名曲の後の停滞期にあたる1815年に作曲されたもので、その音楽内容はベートーヴェンの後期の作風の先駆けとなっている。幻想曲風の単一楽章で書かれた第4番とは対照的に第5番は伝統的な3楽章構成を持つが、終楽章でフーガを用いるなどの試みが行われている。

第1楽章: アレグロ・コン・ブリオ。ソナタ形式。ピアノの激しい動きとチェロの気品のある旋律からなる第1主題で始まる。この冒頭の16分音符を含む激しい動機はこの楽章中で重要な役割を担う。第2主題はチェロに現れる穏やかなもの。

第2楽章: アダージョ・コン・モルト・センチメント・ダフェット。三部形式。5つのベートーヴェンのチェロ・ソナタのなかでの唯一の緩徐楽章。瞑想的な主部と束の間の幸福のような中間部。切れ目なく第3楽章に入る。

第3楽章: アレグロ～アレグロ・フガート。晩年のベートーヴェンが好んだ対位法を用いた、壮大なフーガ。後半に新たな主題も加わる。

《魔笛》の主題による12の変奏曲へ長調 作品66

この変奏曲は、モーツァルトのオペラ《魔笛》で歌われるパパゲーノの有名なアリア「恋人か女房か」の旋律を主題としている。作曲は1796年頃と推測される（初期の作品にもかかわらず出版社により作品66と番号づけされた）。ベートーヴェンには、ほかに、《魔笛》の「愛を感じる男たちには」の主題による7つの変奏曲、というチェロとピアノのための変奏曲もある。

チェロ・ソナタ第3番イ長調 作品69

チェロ・ソナタ第3番（作品69）は、ベートーヴェンの創作活動が最も充実していた時期、つまり交響曲第5番（作品67）や交響曲第6・《田園》（作品68）と同時期の1808年に書き上げられた。この力強くスケールの大きな傑作は、ベートーヴェンの5つのチェロ・ソナタのなかで最も人気の高いものであり、頻繁に演奏されている。

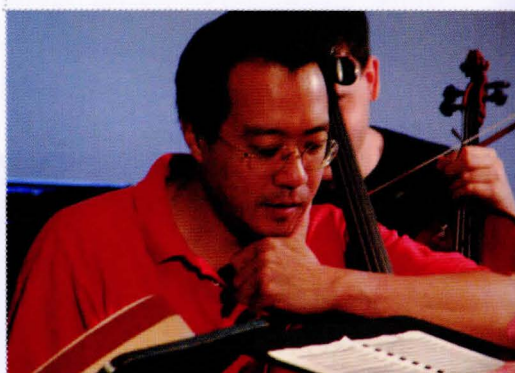
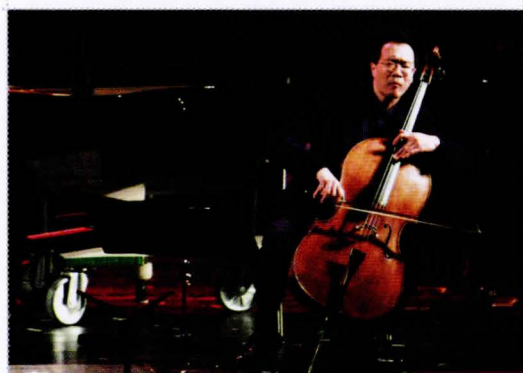
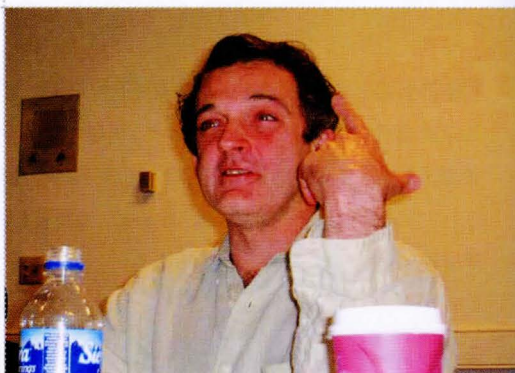
第1楽章：アレグロ・マ・ノン・タント。ソナタ形式。冒頭、チェロが伸びやかな第1主題を奏でる。第2主題はチェロの8分音符の上昇音型とともにピアノによってレガートに歌われる。その後、ピアノに勇ましい新しい主題が現れ、チェロが繰り返す。終わり近くで2つの楽器がユニゾンで第1主題を雄大に奏でる。

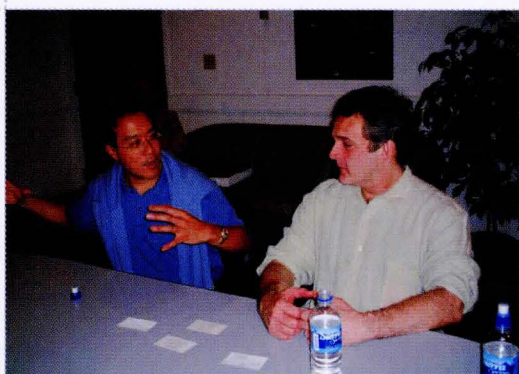
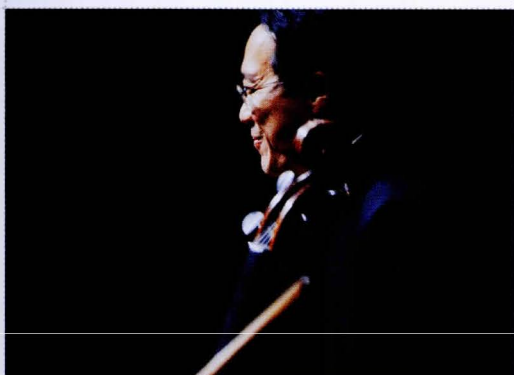
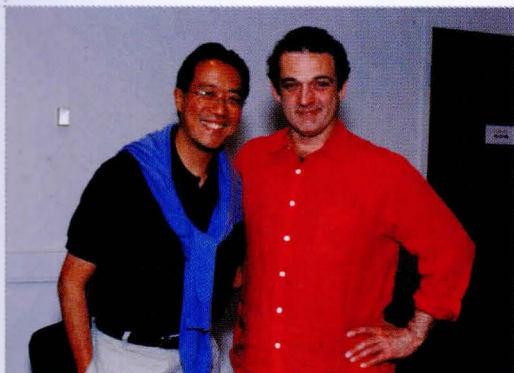
第2楽章：スケルツォ、アレグロ・モルト。シンコペーションの効いたスケルツォ。ベートーヴェンらしい諸諷味が感じられる。中間部はチェロの深々とした重音で始まる。

第3楽章：アダージョ・カンタービレ〜アレグロ・ヴィヴァーチェ。ソナタ形式。優美なアダージョの序奏のあと、アレグロの主部に入り、チェロが明快な第1主題を提示する。第2主題はチェロが高音域で歌い、ピアノがせき立てるように応える。

山田治生（音楽評論家）







「ヨーヨー・マと共演する マーク・モリス ダンス・グループ」

松澤慶信インタビュー e+(イープラス)「クラシック手帖 音楽 otoh」より転載

天才チェリストのヨーヨー・マと共演する形でこの春、初来日公演を果たすマーク・モリスダンスグループ。以前から、このカンパニーの上演を見て来たという舞踊美学者・松澤慶信氏に色々話を聞いてみました。

(聞き手：音楽編集部 安藤光夫)

——— マーク・モリスはアメリカで1980年に自分のカンパニーを結成し、注目を集めるようになりました。アメリカのダンス史の流れの中で彼の登場はどう見ればいいのでしょうか。

松澤 「第二次大戦後、世界のダンスシーンの最前線をリードしてきたのはアメリカでした。しかし1980年代は、それが一つの節目、区切りを迎えた時期だったと思うんです。

ニューヨークシティバレエを拠点に、20世紀のモダンバレエをリードしてきたジョージ・バランシンがこの世を去ったのが1983年。ミハイル・バリシニコフは華々しくアメリカン・バレエ・シアターの芸術監督に就任したけれど、それも1989年迄でした。また、モダンダンスの芸術性を飛躍的に高めてきたマーサ・グラハムや、マース・カニングハムらも、この時期に至って、もはや新たなインパクトをもたらすことはなかったし、60年代以降のポストモダンダンスの勢いも既に落ち着いて来ていた。その中でミニマリズムのダンス、例えばルシнда・チャイルズやモリッサ・フェンレイなどは80年代のパフォーマンスという表現形態の中でかろうじて頑張っていたけれど、世界の新しいダンスの潮流は、明らかにヨーロッパのヌーヴェルダンスへ移りつつあったわけですね。

そんな時期にアメリカから出てきた数少ない新進気鋭のコレオグラファーがマーク・モリス。モダンダンス界のモーツァルトなんて言われ方をされていますが、まさにそんな、アメリカ的な軽快さを武器にした寵児という受容のされ方はあったと思います。コレオグラファーとしては、

アメリカン・モダンダンスの流れの中で極めて正統的ですが、それがかえってわかりやすく、素直に受け取られたというのはあるかもしれないですね。例えば、モダンダンスの長老ともいべきポール・テイラーも非常に素直なものを作り続けるけれど、今見るとそれが却ってダンシングする喜びに賭けるダンスの強靱さを見ますね。マーク・モリスにもそれに近いものがある。『V』の舞台写真なんか見ると、ポール・テイラーに通じるものを感じますよね

——— 松澤さんのおっしゃられた80年代アメリカのミニマル系では、1987年にジョン・アダムスのオペラ『ニクソン・イン・チャイナ』の振付をマーク・モリスが担当しているんですね。これ、個人的にフィリップ・グラス×ロバート・ウィルソン×ルシнда・チャイルズの『浜辺のアインシュタイン』（1976年）並に好きなミニマル・オペラなんですけど、これもやはりアメリカ的な陽気さめいたものがみなぎっていましたね。でも、そんな、彼が1988年にベルギーはブリュッセルの王立モネ劇場の芸術監督に迎えられたというのはちょっと意外な感じがしないでもないのですが。

松澤 「丁度80年代に王立モネ劇場は、モーリス・ベジャール&20世紀バレエ団と離れたんです。ベルギーは、ローザスのアンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルや、ヤン・ファール、ヴィム・ヴァンディケイビュスといった次世代の大物たちが徐々に始出て来るわけですが、当時はまだベジャールの後釜として芸術監督に就任するには少々若かった。だから、その空白期を埋めるに相応しいコレオグラファーとしてマーク・モリスに白羽の矢が立てられたんです。クラシカルなアプローチがしっかりと出来て、それでいてアメリカらしい軽さが新鮮でもある。で、発表された作品がNHKでも放映されたことのある『くるみ割り人形（原題はThe Hard Nut）』。アメリカン・コミックのような、或いはポップアートのような舞台美術が印象的でした。

「ヨーヨー・マと共演するマーク・モリス ダンス・グループ」

その頃の彼の代表作ですね。ただ、ヨーロッパの観客たちには刺激が強すぎたようで、反応は様々だったようです。ベジャールを愛していた地元の人々から見るとあまりに方向性が違いすぎているわけですからねえ」

——— それで、90年代に入って、王立モネ劇場のマーク・モリスの後任は、ベジャール学校出身のケースマイケルに引き継がれるわけですね。ベルギー人にその座が戻ったんですね。

松澤 「そう。まあ、ただベジャールが最近ではマーク・モリスのようなポップな軽さを取り入れているわけですが……。で、その時期、1990年にはバリシニコフのホワイト・オーク・プロジェクトの振付を担当して、後で日本にも来ています」

——— ホワイト・オーク・プロジェクトですか？

松澤 「ホワイト・オークというのはアメリカにあるバリシニコフの別荘の名前。そこで彼が数人の仲間を集めて作ったダンス・プロジェクト」

——— マーク・モリスはイギリスで昨年、二度目のローレンス・オリビエ賞を受賞しているそうです。イギリス留学経験もある松澤さん、イギリスのダンス受容状況というのはどうなのでしょう。

松澤 「イギリスには、マイケル・クラークみたいなものが突然変異的なのがきわもので登場する以外には、あまりインパクトのあるダンスアーティストって出てこないんですよね。だから、やはり80年代まではアメリカ系モダンダンスに傾斜、90年代以降はフランス・ヌーベルダンスの影響が強くなってゆく。ただ、ローレンス・オリビエ賞というのは演劇畑の人々が審査に

多く関わっていて、そっちの目で見ると、マーク・モリスというのはなかなか面白い存在だとい
うのではないのでしょうか。ビジュアル性の高い作品を作ったり、自らゲイであることを明らか
にし同性愛とかジェンダー（性差）的なことをテーマに取り上げたりもする。素直なわかりやすさ
も手伝って、演劇客からも受け入れられる素地が充分にあるのだと思います」

———今度来日して上演する、ヨーヨー・マとのコラボレーション作品『フォーリング・ダウン・
ステアーズ』は、バッハの「無伴奏チェロ組曲第3番」を踊るんだそうです。これはどうでしょう。

松澤 「マーク・モリスはどんな音楽に対しても、非常に素直な音取りをして振付けができる人
ですよね。観る側からわかりやすいのはもちろんのこと、一緒にやる音楽家にとってもジョイント
を楽しめる相手なのではないかな。今回の見どころとしては、ヨーヨー・マもまた、ダンサーたち
に負けず劣らずパフォーマンス性の高い演奏をする人ですから。非常に表情豊かに（笑）。
その意味では演奏とダンスの真剣勝負を存分に楽しめるライブだと思います」



まつざわ・よしのぶ／1989年～93年、ロンドン・ラバン・センター留学。現在、日本女子体育大学助教授（舞踊美学専攻）。
他に東京外国語大学、慶應義塾大学、日本大学芸術学部、明治学院大学等で教鞭をとる。

「ヨーヨー・マ&MMDG……

その素晴らしき世界の扉を叩いてみて」

横堀朱美

音楽評論家

気候不順な日本列島を脱して、降り立ったサンフランシスコの風はキリッと冷えた白ワインのように冷たくて爽やかでした。夜になると薄着がこたえるほどでしたが、日中のまばゆい陽光と空の青さは初夏を思わせました。

4月19日の午後に東京を脱した飛行機は、時差の関係で、現地時間の同日のお昼にシスコに到着。その足で、シスコの対岸イーストベイにあるバークレーへ向います。目指すは、カリフォルニア大学本校のUCバークレー校のキャンパス内に建つゼラーバック・ホールです。折からステージでは、その夜から三夜連続で四公演（含マチネ）行われる、ヨーヨー・マ&マーク・モリス ダンスグループ（MMDG）によるバークレー公演のリハーサルが進行していました。舞台背景や照明の微調整、演奏とダンスの間合いの確認など、微にいきり細をうがち、入念にチェックしていきます。今回のバークレー公演は、ヨーヨー・マによる新しい音楽体験“シルクロード・プロジェクト”の一環でもあります。

ニューヨークを本拠地に活動するMMDGは、アメリカでも指折りの、トップ・バレエカンパニーです。グループを率いる天才振付師マーク・モリスは1956年アメリカのシアトルに生まれ、若い頃から数々のダンスカンパニーで活躍したのち、1980年に自らのMMDGを組織します。マーク・モリスらのプロフィールは別項にもその詳細が掲載されるかと思いますが、マーク・モリスはMMDGのみならず、他のバレエカンパニーのための演出や振付けを行うほか、数々の歌劇場の舞踊部門の監督及び演出、振付師として精力的に活動しています。また、ミハイル・バリシニコフたちとホワイト・オーク・ダンス・プロジェクトを設立し、あるいはファッション・デザイナーのアイザック・ミズラヒのドキュメンタリー映画「Unzipped」に出演するなど、ファッションやショービジネスの世界でも国際的にその名を知られています。

MMDGのダンスを日本の音楽ファンが見知ったのは、世界的チェリストのヨーヨー・マとのコラボレーションの映像「インスパイアド・バイ・バッハ」（1998年エミー賞受賞作品）が最初だったかもしれません。ヨーヨー・マの演奏するJ.S.バッハの「無伴奏チェロ組曲第3番」に振付けた「フォーリング・

ダウン・ステアーズ」は、バッハの音楽と調和を奏でながらもオリジナリティにあふれ、MMDGのはかりしれない魅力を伝えて、とても印象的でした。なお、この映像バージョンは、〈ライブの観客を前に舞台上で演じられるようにみえてはならない〉というコンセプトのもと、〈ひとつの固定された視点から見るという前提から解放された〉空間で踊られています、その後の舞台上演では、観る側のことを考慮したフォーメーションが採られています。

さて、パークレーでの、その本番。彼らの四公演いずれも完売で、私が観た舞台は2日目のマチネです。午後2時開演。ゼラーバック・ホールは満員の観客で埋めつくされていましたが、しわぶきひとつ聴こえません。

1作目は「ワールド・パワー」。ルー・ハリソンの音楽を、ハーブを加えたガムラン・オーケストラが演奏。漆黒の舞台空間のなかに、黒い衣装を着たダンサーたちが次々登場し、ほのかなオレンジ色のスポットに照らされながら、7人ずつの2グループに分かれて、インド舞踊などの動きをとりこんだユニゾンのダンスを繰り広げます。これはパークレーで1995年10月に初演された演目なので、観客にとっては懐かしい作品のようです。

2作目は、世界初演の作品「コラム」。ジャージーな趣をもつザキール・フセインの音楽が、ヨーヨー・マのチェロとB.ストリートのベース、E.アイヴァーソンのピアノ、そしてZ.フセインのタブラとパーカッションによって演奏されます。多彩な色が塗りこめられた舞台背景と、まばゆいばかりの光に包まれた空間で、10人のダンサーたちが、あたかもヨガのエキササイズをこなすかのように、多種多様にしなやかな動きを見せ、あるいはサークル・ダンスを行うなど、縦横かつ自在に、舞台狭しと踊ります。彼らがその肉体を使って語る魅惑的で新しい言語ともいえる、それらの動きを見ていると、人間とはかくも美しいものかと、あらためて思えてきます。

MMDGのメンバーは現在総勢18名。それぞれのプロポーションも容姿も多彩なら、髪の色も肌の色も背格好も跳躍の高さもまちまち……。『私のカンパニーはダンスの種類はもちろん、何にも縛られない』

「ヨーヨー・マ&MMDG……その素晴らしい世界の扉を叩いてみて」

というマーク・モリスの意思是、メンバーらの選抜にも確かに反映されているようです。「音楽とダンスが美しく重なりあって、ひとつの総合的なパフォーマンスを作りだしますが、音楽とダンスが同じことをしていないといけないと思う。音楽がダンスの伴奏になってはいけない。ダンスは音楽を広げる要素。音楽を観て、踊りを聴いてください」とマーク・モリスは言います。音楽に振付けるとき、マーク・モリスはなによりもまずスコア（総譜）を読み解いて、それから動きを考えると言い、謎めいた作品名はあとから考えてつけるとも言います。そんなマーク・モリスの振付けは多種多彩で、舞台には常に、一種独特の浮遊感が広がります。観ている私たちも、心に魔法の息を吹きかけられたように、そして夢の世界を手に入れた子供のように、MMDGの舞台に素直に誘われ、感動を共有することになります。

ヨーヨー・マ&MMDGのバークレー公演は、再び休憩をはさんで、シューマンの「ピアノ五重奏曲作品44」に振付けた「ヴィー」が上演されました。2001年10月にロンドンで初演された作品で、ニューヨーク市に献上されています。青い衣装を着た7人と、白い衣装を着た7人が対照的に、作品名の由来ともなった“V字型”に交錯し、静と動のダンスを繰り返し広げます。マーク・モリスの作品ではめったに登場しない古典的な手法の“男女の組みあわせ”も観られました。観客は舞台中央のダンスを観ながら、舞台下手袖で演奏するヨーヨー・マたちの演奏を、PAを通して聴きます。「ここでの青と白が、具体的に何かを象徴してるわけではありません。この作品に限らず、ダンスは最高のエンタテインメントですし、観る側の問題ですから、どう観てほしいとか、何を感じてほしいとか、あまり言葉では語りたくありません」と話すマーク・モリス。質の高いテクニックと表現力、しなやかな感性と深い芸術性から生みだされるダンスの醍醐味、そしてMMDGならではの世界とクリエイティブな広がりを楽しませてくれた彼らに、観客はスタンディング・オベーション！ 惜しめない喝采を贈っていました。

★

20日のマチネ公演を終えたあと、ヨーヨー・マとマーク・モリスに取材を試みました。「MMDGと共演するたびに、無限のバラエティが楽しめます。モリスとの最初のコラボレーションで、互いに同じ哲学を

持っていると感じました。私の演奏や音楽観が、モリスの影響を受けているのは確かです。彼の振付けを観ると、彼の耳目を通して解釈された音楽が、舞台上で生きていることを実感します。音楽もダンスも心の表現…」とヨーヨー・マが言えば、「音楽とダンスが共存しながら、何か別のものを創りあげていく、そこが大事なだと思います。マの演奏も、私たちのダンスも、もとは同じ楽譜から生まれたもの」と言うモリス。「芸術の根源にあるのは創造性、イマジネーションだと思ってます。それが大きければインスピレーションも豊かになります。モリスは芸術的な真実は何かということに近づこうと努力してる人です。そして形式を重んじる人。形式や構造が存在するからこそ、そこに可能性が見えてくるし、逆に自由も得られ、表情も豊かになります。彼は真実への道を何通りも提案してくれます、振付けという形でね。でも最後は、観る側がそれらを感じとって自分のものとしていかなければなりません」と話すヨーヨー・マ。それに応えて、「素材は提供するけど、それからどういう結論を導き出すかは皆さんの自由です。押し付けたくありません。MMDGの舞台は、ひとり一人が違った見方で楽しんでもらえれば最高です。日本公演でも、初めて観る人をも納得させる試みをしたいと思っています。それにつけてもヨーヨー・マは本当に創造性豊かな人です。今後も一緒に何かやろうということになるでしょう。すばらしきパートナーです。彼との共同作業は楽しい。今回の舞台のボスは私ですけど…ね(笑)」とモリス。

さて、2002年FIFAワールドカップ™開催記念行事として行われる「ヨーヨー・マ&MMDG」来日公演(MMDGは初来日)では、「ヴィー」(音楽はシューマンのピアノ五重奏曲作品44)をはじめ、ヨーヨー・マの演奏を前提に創られた「アーギュメント」(音楽はシューマンの「民謡風の5つの小品」)、そして「フォーリング・ダウン・ステアーズ」(音楽はJ.S.バッハの「無伴奏チェロ組曲第3番」)、次いでマーク・モリス自身が踊る「ペカディロス」(音楽はサティの「子供らしさ」といった作品が上演されます。

「今回の作品を象徴するのは"信頼"という言葉だと思います」と語るヨーヨー・マとマーク・モリス率いるMMDGならではの、音楽とダンスの絶妙なアンサンブルを、心ゆくまで楽しみたいと思います。

「マとサハロフの デュオに期待する」

片桐 卓也
音楽ジャーナリスト

ヨーヨー・マがベートーヴェンのチェロ・ソナタを日本で弾くというのは、実に久しぶりのような気がする。そしてオール・ベートーヴェン・プロとなると日本では初の試みとなる。いま貴重な機会を僕たちは得たことになる。

81年のヨーヨー・マ初来日時のプログラムが手元に残っている。その時のリサイタルは全部で4回。そのそれぞれが違ったプログラムで構成されているが、メインはベートーヴェンとブラームス、それにシューベルトのアルペジオネだ。ブラームスはヴァイオリン・ソナタの第3番のチェロ編曲版と書いてあるが、これを含んだ演奏会は残念ながら聞かなかった。僕が聞いたのは81年12月1日赤坂の都市センターで開催された演奏会で、その中にはベートーヴェンのチェロ・ソナタの第4番が入っている。この演奏会で記憶に残っているのは、まず舞台上にも補助席が作られるほどの満員の賑わいだったこと、前半のバッハの無伴奏第5番の演奏中にヨーヨーが弦を切ってしまったが、その時の処理のマナーが非常に良かったこと、ドビュッシーのソナタから始まり、ベートーヴェン、ショパン（「序奏と華麗なポロネーズ」）と続く後半が非常に素晴らしかったこと、そしてアンコールで弾いたクライスラーの作品（もちろんチェロ編曲版）があまりにも見事な技巧と音楽性の合致で、陶然とするほどだったということ。その後も長くヨーヨー・マの演奏を聞こうと決意するきっかけになった演奏会だった（ピアノはパトリシア・ザンダー）。

その時ヨーヨーはまだ20代半ばを過ぎたあたりだったが、自分と同世代の演奏家の中に、これほどの天才が現れたことに、僕は心底驚いたものだった。その時からはや20年以上。ヨーヨーはより巨大な存在となって、世界の音楽界の中心に居る。そして名声に溺れることなく、探求心と好奇心を忘れずに、常に新しい可能性の世界を旅しているのである。勝手な言い方を許してもらえば、そんな彼の存在は、僕の最大の励ましである。

90年代に入り、ヨーヨーは大きなプロジェクトに取り組むことが多くなった。そのひとつがバッハの無伴奏チェロ組曲を映像と共に新しく録音すること、そしてもうひとつが「シルクロード・プロジェクト」である。そしてそのふたつともが、実にユニークな形で僕たちの目の前に提示された。バッハの多様な6つのチェロ曲を、それぞれ違った形での映像作家とのコラボレーションでヴィジュアルライズした作品は、ヨーヨーの芸術的なふところの広さがなければ実現できなかった。シルクロードの方は、彼の芸術的なセンスだけでなく、事業家としての側面が働かなければ、ここまで大きなプロジェクトにはならなかっただろう。

しかしそれもこれも、すべてチェロという楽器の可能性の極限まで、そしてクラシック音楽の領域の極北まで探検してみたいというヨーヨー自身の、芸術家としての止むに止まれぬ衝動のようなものによって

動かされているのだと僕は理解している。そしてその探究は、いつかクラシック音楽の世界に、新しい実りをもたらすのだ、とも信じている。

そのひとつの例として、ヨーヨーが実際に例として示してくれたことがある。2年前の来日時に、東京芸術大学でマスター・クラスのようなレクチャーを行った時のことだ。そこでは民俗音楽の世界（その時はアメリカのフィドル音楽だったが）をチェロで表現するために、それまでのクラシック的なボウイングをいったん止めて、新しいボウイングに挑戦したこと、そしてそれがクラシックの世界にフィードバックされて、バッハの無伴奏曲のボウイングに活かされている、という実例をヨーヨー自身が演奏で教えてくれたのだ。まず他の領域への出発、そしてそこでの体験を豊かな感受性と柔軟な思考で受け止めること、そしてそれを基に、さらに自分で得た何かをクラシックの世界に持ち替えること。そんな繰り返しが、この10年間のヨーヨーの軌跡だったと言えなくもないだろう。

そのレクチャー時にはピアニストのヴァディム・サハロフとの共演で、アゼルバイジャンの作曲家アリ＝ザデの作品と、さらにショスタコーヴィチのチェロ・ソナタの分析も行われたが、その後に行われた名古屋での演奏会で、ヨーヨーとサハロフが共演したショスタコーヴィチは本当に胸を撃つ演奏だった。音楽のあらゆる細部が全体の中で意味を持ち、微細なモチーフがいつしか複雑な感情を伴って熱いクライマックスに結晶し、またピアニシモの中に苦い悔恨や悲しみが感じられるような、実に「リアルな」ショスタコーヴィチ体験だった。

いまその時のふたりがここでベートーヴェンを共演する。それは僕にとってももちろん待望だったが、それ以上に、想像のつかない何かに遭遇するのではないかという不安さえ入り交じった不思議な興奮を覚えることでもある。もはや20年前の、ただひたすら美しく完ぺきな演奏ではなく、ベートーヴェンの音楽の細部の中に潜む様々なかくし味を、ヨーヨーとサハロフは見事な一皿にして提出してくれるに違いないからである。バッハの無伴奏曲と並んで、ベートーヴェンのソナタ集はチェリストが必ず帰るべき古典中の古典と言えるだろう。ヨーヨー自身もアックスとの共演で81～85年にソナタ全曲を録音している。しかし、バッハの世界を深め、シルクロードを音楽的に旅している新しいヨーヨーにとって、ベートーヴェンはまた違った姿を見せているはずである。ピアノのサハロフも最近ベートーヴェンの音楽に集中的に取り組んでいると聞く。この一夜にふたりが弾くベートーヴェン。その中には今後のヨーヨーの演奏を予見させる何かが見えてくるかもしれない。耳をそばだてて聞きたい。

プロフィール

Profile

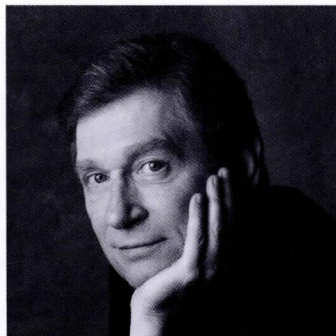


ヨーヨー・マ (チェロ)
Yo-Yo Ma, Cello

1955年パリで生まれる。4歳より父にチェロを学び、わずか6歳でリサイタルを開く。62年ニューヨークに移住、ジュリアード音楽院に入学。10代のうちにカザルスやロストロポーヴィッチら巨匠たちと肩を並べるアーティスト、と評価される。その後ハーバード大学にも学び、古典文学で名誉博士号を授与されている。81年の初来日以来18度もの来日を果たし、無伴奏、室内楽、協奏曲などの分野でクラシック音楽愛好家を唸らせるだけでなく、宮沢賢治の童話「やまなし」をもとに委嘱した新作を含むファミリーコンサートや坂東玉三郎との共演、また、アメリカのカントリー・ミュージックをベースに創作した「アパラチア・ワルツ」、そしてタンゴの革命児ピアソラの作品を演奏する「ブレイズ・ピアソラ」等の演奏会で多くのファンを獲得した。彼は世界中のオーケストラのソリストとしての仕事とリサイタルや室内楽の仕事の間でバランスを保つようにしている。そんな中で彼は数々の幅広い共同作業や音楽の創造の中で、インスピレーションを引き出してきた。近年J.S.バッハの「無伴奏チェロ組曲」の再研究を行い、そして世界中の多くの都市で演奏し、また新録音も行われたがそれと同時に「インスパイアド・バイ・バッハ」と銘打たれた一連のフィルムを制作した。これは6曲の「無伴奏チェロ組曲」それぞれに、異分野の芸術家がヨーヨー・マとともに作品の解釈、作品の創造過程を描写しフィルムに収めるという新しい共同作業である。6人の芸術家とは、演出家でありダンスの振付師であるマーク・モリス、歌舞伎俳優の坂東玉三郎、フィギュア・スケートのジェイン・トーヴィルとクリストファー・ディーンなどが制作、出演し映像作家のトム・エゴヤンやフランソワ・ジラルドなどが撮っている。これらのフィルムはソニー・クラシカルよりホーム・ビデオとしてリリースされ、1998年のエミー賞その他いくつもの映画祭賞をはじめとする数多くの栄誉を勝ち取った。そのヨーヨー・マが現在積極的に取り組んでいる事業が「シルクロード・プロジェクト」である。これは古来の東と西の文化を結んだシルクロード(絹の道)に埋もれた、あるいは今に残る音楽を調査し、それをもとに現代音楽家に作曲を委嘱、新しいシルクロードの音楽を創造。その曲をヨーヨー・マと彼のアンサンブルやオーケストラとともに披露しようというものである。これらのコンサートやイベントは、2002年にワシントンDCで開催される「スミソニアン・フォークライフ・フェスティバル」をゴールとして昨年より世界の主要都市で行われている。バロックから現代音楽までの幅広いレパートリーを持ち、録音は50種類以上の作品をリリースしている。エイヴリー・フィッシャー賞、グラミー賞(9回)をはじめ数多くの賞を受賞している。1997年香港返還の公式式典においてタン・ドン作曲・指揮による交響曲1997「天、地、人」のソリストとして登場し、全世界から注目された。2000年には東大寺・大仏殿(奈良)において演奏奉納を行い、その模様を収めた番組が2001年度国際エミー賞を受賞した。本年はソルトレイク・シティでの冬季オリンピック開会式にも出演し話題となった。

プロフィール

Profile

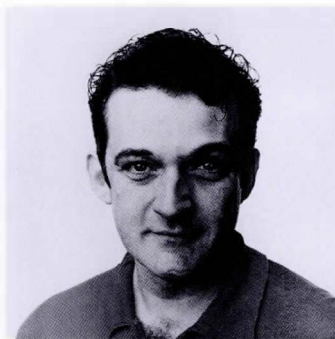


ヴァディム・サハロフ (ピアノ)
Vadim Sakharov, Piano

1946年カスピ海沿岸の町バクーに生まれる。幼少の頃より音楽的な才能を示し、国立モスクワ音楽院にて名ピアニストで音楽学者のヤコブ・ミルシテインに学ぶ。在学中から秀でた才能は広く認められ、S.ネイガウス、J.ミルシテインなど著名な教授たちは不在の時の授業を任せていたという。旧ソビエト圏内で活躍を開始し、先進的個性を持つピアニストとして知られ、当時、演奏が禁止されていたメシアン、シルヴェストロフ、シュニテなどの作品を演奏し続けていた。しかし政府から敵意を持たれ、非難の対象となる要因にもなった。このような状況の中にあって、他のピアニストの演奏会になど滅多に出掛けることのなかったエミール・ギレリスは、サハロフの演奏会にだけは足を運び、自らの演奏会にも同じ曲目を取り入れておこなっていたといわれる。そしてギレリスのサハロフに対する賞賛と友情は年齢差を越えて熱く注がれ、やがてD.オイストラフ、ユーリ・エゴロフ、レフ・オボーリン他、幅広い親交へと繋がり、共産主義の息苦しい中で大きな支えとなった。1989年フランスに移住してからのサハロフは、ヨーロッパ各地のコンサート、音楽祭にたびたび招かれるようになった。1992年にはギドン・クレーメル、クリストフ・エッシェンバッハ、バンベルク交響楽団一行とバルト三国を演奏旅行。ギドン・クレーメルには「ギレリス、リヒテルの後を継ぐ本格派ピアニスト」と賞賛され、室内楽グループ「クレメラータ」との共演や、彼のデュオパートナーとして多才な演奏活動を展開している。また、ヴェンゲロフ、トレチャコフ、レーピン、モニゲッティ等との共演、ソリストとしてもバシュメット室内管弦楽団、ヨーロッパ室内管弦楽団、イギリス室内管弦楽団、ロンドン交響楽団などに招待され、その独特の個性と豊富なキャリアを開花させている。特にクレーメルとは録音でもたびたび共演し、室内楽のメンバーとしても数回来日している。最近では2000年11月にヨーヨー・マとの共演で日本ツアーを行い、得意とするショスタコーヴィッチを始め、名演が各地で絶賛された。作曲家シュニテは「彼は何よりも偉大な音楽家である」と称え、ある批評家は「サハロフがリサイタルを開くときは、なにかもかもやめて聴きにいくべきだ。彼は激しい、不思議な演奏才能の持ち主である」(ザ・タイムス)とまで言わしめている。2000年4月～2001年3月、愛知県立芸術大学客員教授。

プロフィール

Profile



マーク・モリス&マーク・モリス ダンスグループ(MMDG)
Mark Morris & Mark Morris Dance Group

マーク・モリスは1956年米国シアトル生まれ。若い時期から数多くの著名なダンス・カンパニーに出演をはたし、1980年に自らのマーク・モリス ダンスグループ(以下MMDG)を組織する。自分のダンス・グループだけでなく数々のバレエ・カンパニーのために演出および振付けを行っている。1988年から1991年まではブリュッセルの王立モネ劇場で芸術監督をつとめ、その間に3夜に渡って上演される『ハード・ナット』(アメリカン・コミック仕立ての「くるみ割り人形」)、『アレグロ』、『ディドーとエネアス』を含む12作品の創作やミハイル・バリシニコフとのホワイト・オーク・ダンス・プロジェクトを設立するなど大変精力的に活動を行う。彼は、監督および振付け師として数々の歌劇場で幅広く活躍している。最近では1997年にはロイヤル・コヴェント・ガーデン歌劇場にて、エジンバラ国際フェスティバルでの初日のプロダクションとして、ラモアの歌劇『プラター』の監督および振付けを担当した。またこの年には『アレグロ』をイングリッシュ・ナショナル・オペラとともにイギリス初演を果たし、「ベスト・ニュー・ダンス・プロダクション」として、ローレンス・オリヴィエ賞を受賞した。さらに今年、MMDGは2001年のロンドンにおける活躍に対して、2度目のローレンス・オリヴィエ賞を受賞した。MMDGは、国際的に活躍する中で最近2つの映画プロジェクトを完成した。ひとつは、チェロ奏者ヨーヨー・マとのコラボレーションで、マの演奏するパッハの「無伴奏チェロ組曲第3番」に振付けた『フォーリング・ダウン・ステアーズ』、そしてもうひとつは『ディドーとエネアス』のフィルム・バージョンの製作で、双方ともに大好評を博した。マーク・モリスは、「本道を外れない音楽への献身」、「とても多くのスタイルや感情を魔法で呼び出す能力」などと評されており、その深い芸術性が国際的にも注目されている。

MARK MORRIS

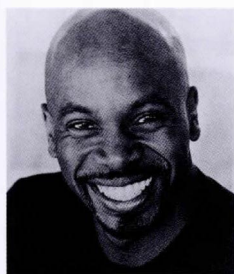


DANCE GROUP

プロフィール

Profile

踊り手たち Dancers



ジョー・ボウイ
Joe Bowie

ミシガン州のランシングに生まれ、ブラウン大学在学中にダンスを始める。卒業後ニューヨークへ移り、1989年にマーク・モリスとの共演の為にベルギーへ渡る以前は、R.ウィルソン、U.ダヴでの公演のほかP.テイラー ダンス・カンパニーで2年間の経験がある。



ローレン・グラント
Lauren Grant

イリノイのハイランド・パークに生まれ、3歳からダンスを始めて高校までクラシック・バレエの基礎を学ぶ。ニューヨーク大学のティッシュ・スクール・オブ・ジ・アートにてモダン・ダンスでBFAを取得し卒業。1998年MMDGに加わる。



チャールトン・ボイド
Charlton Boyd

ニュージャージーに生まれ、インナー・シティ・アンサンブル・シアター&ダンス・カンパニーに所属。ジュリアード・スクールを卒業し、ライモン・ダンス・カンパニーを経て1989年に初めてMMDGへの出演を果たし、1994年にカンパニー・メンバーとなる。



ジョン・ヘギンボサム
John Heginbotham

アラスカのアンカレッジ生まれ。1993年にジュリアード・スクールを卒業し、J.ジャスパーズ、B.マニステリ等との共演、ピロポリス・ダンス・シアターへの客演を経て、1995年から1998年までS.マーシャル&カンパニーのメンバー。1998年にMMDGに加わる。



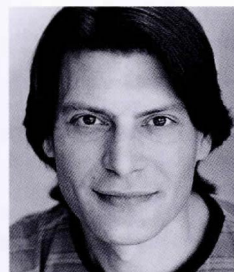
マージョリー・フォークマン
Marjorie Folkman

バーナード・カレッジ卒。A.スベンサー、R.コルトン、S.ヘス、N.ブルヴェルマシュール等での公演のほか、M.カニングハム・ダンス・カンパニーでの代役グループに所属。1996年からMMDGに加入。



デイヴィッド・レヴェンソル
David Leventhal

マサチューセッツ、ニュートン出身。ボストン・バレエ・スクールで基礎を学び、ブラウン大学にて英語と米文学でBAを取得。1998年1月MMDGに加入する前は、M.シュルキンド、スベンサー/コルトン、B.マニステリ、Z.ゴサイナー等への公演に出演。



ショーン・ギャノン
Shawn Gannon

ニュージャージーのドーヴァーに生まれ、D.W.ローゼンにダンスの手ほどきを受ける。1995年MMDGに加入する以前は、L.テオドア・ダンス・マシン、M.デンディ・ダンス・グループ、L.ディー・ダンス・サーズ&ミュージシャンズ、J.コンフォート&カンパニーに出演。



ブレイドン・マクドナルド
Bradon McDonald

1997年ジュリアード・スクールにてBFAを取得。グレース紀賞を得てライモン・ダンス・カンパニーに3年間在席し、数々の主演及び振付をこなし、最近ではA.エイリー・アメリカン・ダンス・シアターのD.マッケイルのアシスタントとして振付を担当。2000年4月にMMDG加入。

プロフィール

Profile

踊り手たち Dancers



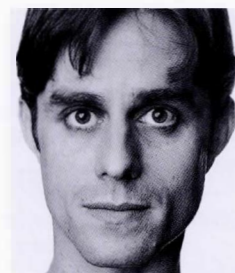
アンバー・マーケンス
Amber Merkens

オレゴンのニューポート出身。1999年にジュリアード・スクールにてBFAを取得し、1999年から2001年までライモン・ダンス・カンパニーに所属。ニューヨーク近郊の劇場での数々の公演で振付を担当し、2001年グレース紀賞を受賞。同年8月MMDGへ加入。



マシュー・ローズ
Matthew Rose

ミシガン大学でBFAを取得。M.グラハム・ダンス・カンパニー、P.リオール・ダンス・シアター、A.アーバー・ダンス・ワークス等に参加。1997年からMMDGに出演を始め、1999年にカンパニー・メンバーとなる。



グレゴリー・ヌーバー
Gregory Nuber

1998年MMDGに初めて出演し、2001年にはカンパニー・メンバーとなる。3年間P.リオール・ダンス・シアターに所属し、ニューヨークをベースに活動する数々の振付師の公演に参加してきた。アリゾナ州立大学で、演技とダンスを学ぶ。



ブリン・テイラー
Brynn Taylor

カリフォルニアのサンディエゴ出身、UCバークレイで分子生物学とダンスを専攻。M.&D.ウッド、M.グラハム、J.グードの作品に出演。2002年MMDGに加入前には、L.ベリロヴ & Co.に参加。



マイリ・オカムラ
Maile Okamura

カリフォルニアのサンディエゴ出身。1996年にニューヨークへ移る以前には、ボストン・バレエII、バレエ・アリゾナのメンバー。N.ブルヴェルマシュール、Z.ゴサイナー他多数の公演に参加。1998年MMDGの公演に初参加し、2001年からはカンパニー・メンバー。



ジュリー・ワードン
Julie Worden

フロリダのナプルス出身、北カロライナ芸術学校を卒業。シカゴの振付師B.アイセン、J.エーカート、S.B.スミスの作品に参加。MMDGには1994年から参加。



ジューン・オオムラ
June Omura

6歳までニューヨーク、その後バーミンガム、アラバマで育ち、8歳からダンス公演に出演。1986年にニューヨークのバーナード・カレッジをダンスと英語に優等を得て卒業。その夏からマーク・モリスに師事し、1988年MMDGに加入。



ミシェル・ヤード
Michelle Yard

ニューヨークのブルックリン生まれ。ニューヨーク想像芸術高校在学中から、本格的な訓練を始め、卒業時にH.タミリス & B.プリス賞を受賞。3年間A.エイリー・ダンス・センターの奨学金を得、ニューヨーク大学でBAを取得。1997年からMMDGに参加

演奏家たち Musicians

イーサン・アイヴァーソン (ピアノ、音楽監督) Ethan Iverson (piano)

モダン・ジャズ・ピアニスト。F.ヘーシュ、S.ロゾフに師事。1998年からMMDGでの演奏を担当。自身のトリオ『ザ・バッド・プラス』を率いて、フレッシュ・サウンドへの録音や、NYのニッティング・ファクトリー、ヴィレッジ・ヴァンガード等へ出演など多岐にわたり活動している。

イラン・ラックマン (ピアノ) Ilan Rechtman (piano)

ロンドン、モントリオール等を始めとする数々の交響楽団との共演を米国内はもとより、世界の80以上の都市で行う。イスラエルのF.シャピラを始めとして数々のコンクールで優勝し、室内楽奏者、作曲家としても幅広く活躍しており、録音も多くある。

コリン・ジェイコブセン (ヴァイオリン) Colin Jacobsen (violin)

1999年に卒業したジュリアード音楽院では、R.マンに師事。14歳でK.マズア指揮ニューヨーク・フィルとの共演を果たす。ソリストとして米国各地でオーケストラと共演、室内楽やソロ・リサイタル、ザルツブルク等国際的な音楽祭への出演など、その活動は多岐にわたる。

アンドレア・シュルツ (ヴァイオリン) Andrea Schultz (violin)

イェール大学卒、クリーヴランド音楽研究所からMMを、ニューヨーク州立大学からDMAを得ている。数多くの国内外の室内楽アンサンブルやオーケストラ、舞踊団との共演を果たし、タンゲルウッド、アスペン等の夏季国際音楽祭へも数多く出演している。

ジェシカ・トロイ (ヴィオラ) Jessica Troy (viola)

ニューヨーク出身。ニューヨーク州立大学及びドイツ、リューベック音楽大学で、P.ネーゲル、C.レヴァイン、B.ウェストファルに師事。ブルックリン交響楽団団員。室内楽や、マルボロ等の音楽祭出演をはじめ、O.ナッセンなど現代作曲家の作品にも意欲的に挑戦している。

スタッフ Staff

マーク・モリス ダンスグループ (MMDG)

バリー・オルターマン (ジェネラル・ディレクター)

Barry Alterman (General Director)

ナンシー・ウマノフ (エグゼクティブ・ディレクター)

Nancy Umanoff (Executive Director)

ヨハン・ヘンゲンズ (舞台監督)

Johan Henckens (Technical Director)

ギレルモ・レスト (リハーサル監督)

Guillermo Resto (Rehearsal Director)

マイケル・ヒーボウスキ (照明)

Michael Chybowski (Lighting Supervisor)

ニコール・ピアース (照明)

Nicole Pearce (Lighting Supervisor)

キャスリン・マクダウェル (衣装デザイン)

Katherine McDowell (Wardrobe Supervisor)

エマニュエル・コラッツィーニ (音響)

Emanuele Corazzini (Sound Supervisor)

日本側スタッフ Japanese Staff

今井慎太郎 (舞台監督)、田中英世 (舞台監督)

黒澤一臣 (大道具)、笹本秀哉 (照明)

宮沢正光 (音響)、宮下卓巳 (音響)、都藤 守 (音響)

中山真一 (ツアー)、植本花子 (ツアー)

MARK MORRIS DANCE GROUP STAFF

DEVELOPMENT / MARKETING

Director of Development and Marketing : Michael Osso

Associate Director of Development : Rob Handel

Assistant Development Director : Alex Pacheco

Marketing Associate : Erin Dadey

ADMINISTRATION

General Manager : Eva Nichols

Studio Manager : Karyn La Scala

Administrative Intern : Laura Wall

FINANCE

Fiscal Officer : Lynn Wichern

Finance Manager : Elizabeth Fox

Fiscal Assistant : Jay Selinger

SCHOOL

School Director : Tina Fehlandt

Assistant to the School Director : Diane Ogunusi

Booking Representation : Michael Mushalla (Double M Arts & Events)

Public Relations and Marketing : Dan Klores Communications

Legal Counsel : Mark Selinger (McDermott, Will & Emery)

Accountant : Kathryn Lundquist, CPA

Orthopaedist : David S. Weiss, M.D.

(NYU-HJD Department of Orthopaedic Surgery)



シルクロード・プロジェクト

The Silkroad Project

ヨーヨー・マのシルクロード・プロジェクトの総決算!!

第36回 スミソニアン・フォークライフ・フェスティバル

シルクロード～文化をつなぎ、信頼を築く～

スミソニアン財団およびシルクロード・プロジェクト

(芸術監督:ヨーヨー・マ) による

会場:ワシントンDC、ザ・ナショナル・モール

開催日時:2002年6月26(水)～30日(日)、7月3日(水)～7月7日(日)

開催時間:11:00AM～5:30PM

イベント開催時間:5:30～9:00PM (入場無料)

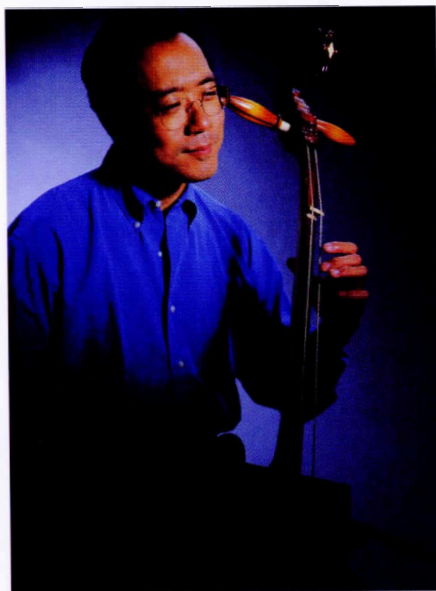
スミソニアン・フォークライフ・フェスティバルは毎年アメリカ国内および世界中のコミュニティの文化的な伝統を讃えている。ヨーヨー・マが創設したシルクロード・プロジェクトの協力により、今年のテーマは「シルクロードー文化をつなぎ、信頼を築くー」となった。「シルクロードー文化をつなぎ、信頼を築くー」はシルクロード地域の人びとの伝統的な生活のアートを讃える。古代シルクロードは広大なネットワークであり、思想・文化・音楽・美術の流れが中央アジアの山々や砂漠を越えて東アジアや地中海に伝えられたルートだった。シルクロードを文化的な発見と交換のシンボルとして、2002年のスミソニアン・フォークライフ・フェスティバルではシルクロードの文化的モザイクを結びつける物語と歴史をもった現代のアーティストを紹介する。

アメリカ、イタリア、トルコ、シリア、アルメニア、アゼルバイジャン、イラン、カザフスタン、ロシア、ウズベク共和国、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、パキスタン、インド、バングラデシュ、ネパール、中国、モンゴル、韓国、日本からの約350人の伝統的アーティスト(音楽家、ダンサー、職人、語り手、詩人、料理人、格闘技家、その他)が出演する。

イブニング・コンサート、伝統音楽のダンス・パーティ、地域の祭りなどが行われる。その間もフード・サービスは営業している。シルクロードに関連した美術品や写真の展示、フィルム上映、シルクロード地域のクラシック音楽のコンサートも行われる。バザーも行われ、日本、中国、南アジア、中心アジア、イタリアの伝統的な昼食(軽食)も販売される。

主な出演者：

- ヨーヨー・マ（毎日必ずどこかのイベントに参加予定）
- 中国、中央アジア、インドの絹織物職人
- チベット、トルコ、トルクメニスタンのカーペット職人
- 中国、トルコの磁器職人
- シリア、アメリカのガラス吹き職人
- イタリア、日本、中国の紙すき職人
- トルコ、アルメニア、中国の書家
- パキスタンのトラック装飾画家
- 中国の京劇俳優
- チベット仏教の修行僧
- カザフ族遊牧民
- アゼルバイジャン、イラン、ウズベク共和国の宮廷音楽アンサンブル
- シリアのネストリウス教聖歌隊
- モンゴル相撲の力士



eccad
S
S
n
f
e
i
t

hilo un poco
herzo
no
brillante
Suite for the
Vocalist
Agricultural
Agitation

